

日本周辺国際魚類資源調査委託事業

舘 洋・井上勇人・柴原浅行・井上祐希・久保典敬・田岡明将

目 的

太平洋を広く回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその資源動向の予測、我が国周辺への来遊量の予測等を行うために必要な科学的情報を収集、整理することを目的に、国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所や各県水産試験場と連携して調査を行った。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集を行った。

方 法

1 沿岸域における漁獲実態調査

県内におけるカツオ・マグロ類(クロマグロ, キハダ, メバチ, ビンナガ)の主要水揚港である和具, 浜島, 宿田曾, 紀伊長島, 尾鷲, 奈屋浦の各港において、漁業種類別の水揚状況を調査した。また、前年度に引き続き、クロマグロ加入状況の早期把握を目的とした曳縄標本船調査(GPS ロガーを用いた漁獲実態調査)を実施した。

2 沖合, 遠洋漁場における漁獲実態調査

沖合, 遠洋漁場における中型, 大型竿釣船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会および近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY 情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別, 旬別稼働隻数および漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況との関連等について検討を行った。

結果および考察

収集した QRY 情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣漁場の変遷を「令和 2 年における三重県中型・大型竿釣船のカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲動向を水産資源研究所に提供した。これらのデータは、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価およびそれに基づく資源管理方策を検討する国際会議において活用されたほか、日本周辺海域への来遊量予測の科学的根拠としても利用された。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細については、関連報文で報告されることから、ここでは本県所属船の 2020 年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況概要をとりまとめた。

1 カツオ漁況

1)沿岸曳縄船

2020 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の曳縄船によるカツオ水揚量は 67.4 トンで、前年(79.7 トン)の 85%、過去 10 年平均値(82.5 トン)の 82%とやや低調な漁況となった(図 1)。特に春季(3~5 月)は、ビンナガ主体の操業となったこともあり、カツオの漁獲は振るわなかったが、秋季以降(9~12 月)は同期過去 10 年平均値を上回る好漁となった。主要 4 港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均 CPUE は 28kg/隻と前年(39kg/隻)を大きく下回り、2001 年以降、最低となった。水揚げが多かった 2 月の魚体は銘柄特大(4 kg 以上)が、10~12 月は銘柄中小(1.5~2kg)と小(1~1.5kg)が主体であった。

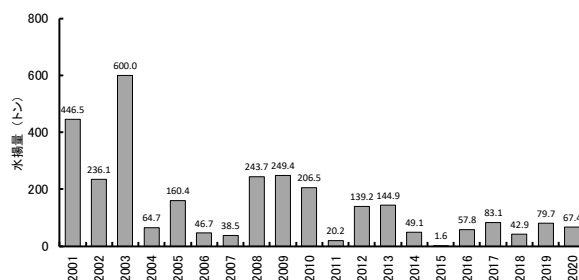


図 1. 沿岸曳縄船によるカツオ水揚量(主要 4 港)

2)小型竿釣船(19 トン以下)

2020 年における三重県主要 4 港(和具・浜島・長島・尾鷲)の小型竿釣船によるカツオ水揚量は 455.5 トンで、前年(734.9 トン)の 62%、過去 10 年平均値(436.5 トン)の 104%で平年並みの水揚量となった(図 2)。主要 4 港の水揚量と水揚隻数から求めた年間の平均 CPUE は 666kg/隻で過去 10 年平均値(1,000 kg/隻)を下回った。

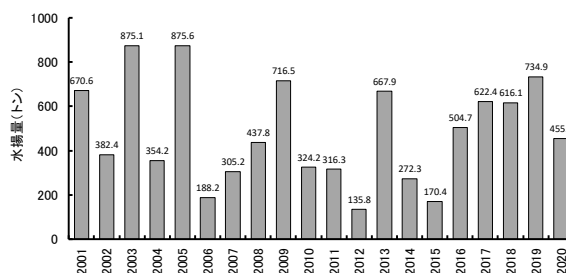


図 2. 小型竿釣船によるカツオ水揚量(主要 4 港)

県内市場の水揚げデータによれば、水揚げの多かった6、7月の魚体は、銘柄特大（4kg以上）を主体に、銘柄大（2.5～4kg）も多く水揚げされた。

3) 中型竿釣船

QRY 情報に基づく 2020 年の三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量は 3,165 トンで、前年（6,238 トン）の 51%、過去 10 年平年値（6,515 トン）の 49% となり、漁獲統計のある 1987 年以降では最低の漁獲量となった（図 3）。

操業は、2 月上旬から硫黄島西（N23～25° E138～143°）の海域で始まり、3 月には主に N25° 以北の広範囲の海域で操業した。4 月に入り、伊豆諸島周辺（N29～34° E137～140°）の海域を主体に操業したが、5 月には近海の広範囲でビンナガ主体の操業となり、6 月には東北沖（N32～37° E142～152°）においてビンナガ主体にカツオ混じりで操業した。7 月以降はカツオ主体の操業となり、東北沖（N37～42° E142～153°）で 11 月上旬まで操業した。

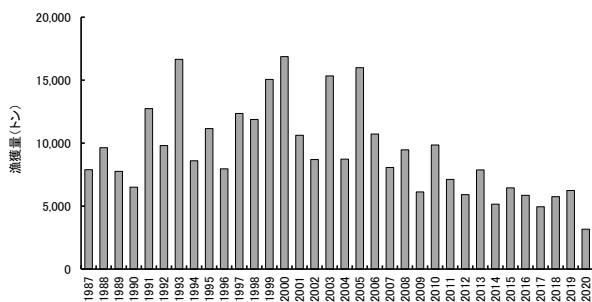


図 3. 三重県中型竿釣船によるカツオ漁獲量

4) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2020 年の三重県大型竿釣船によるカツオ漁獲量は 1,895 トンで、過去最低の漁獲量となった前年（1,780 トン）をわずかに上回った（図 4）。なお、2017 年からの漁獲量の大幅な減少は、着業船の減少（2016 年：5 隻、2017 年：2 隻）に起因するところが多い。

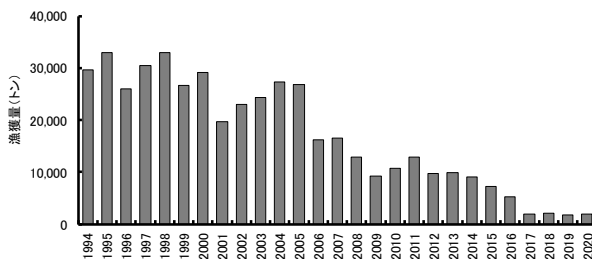


図 4. 三重県大型竿釣船によるカツオ漁獲量

2 ビンナガ漁況

1) 中型竿釣船

QRY 情報に基づく 2020 年の三重県中型竿釣船によるビンナガの漁獲量は 5,197 トンで、前年（1,393 トン）の

373%と極めて好漁となった（図 5）。

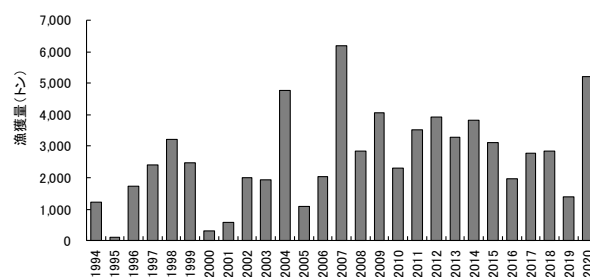


図 5. 三重県中型竿釣船によるビンナガ漁獲量

2) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2020 年の三重県大型竿釣船によるビンナガ漁獲量は 695 トンで、過去最低の漁獲量となった前年（174 トン）を大きく上回り、近年では好調な漁況となった（図 6）。

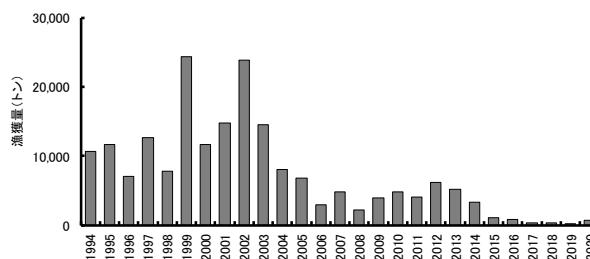


図 6. 三重県大型竿釣船によるビンナガ漁獲量

3 クロマグロ漁況

1) 漁業種別水揚げ状況

三重県主要 6 港における 2020 年のクロマグロ水揚量（全漁業種）は 15.5 トンで、不漁であった前年（5.7 トン）を上回り、過去 10 年平均値（17.5 トン）の 89% でほぼ平年並みの水揚量となった。主な漁業種別は、まき網、定置網、曳縄であった。

2) クロマグロ養殖用種苗（ヨコワ）の採捕状況

熊野灘沿岸域における 2020 年の養殖種苗用ヨコワ漁（曳縄）は、前年より 4 日遅い 7 月 19 日から始まり、県内養殖業者の池入れ予定数を満たさないまま、9 月 1 日に終漁した。標本漁協所属船によるヨコワの活け込数量は約 3,500 尾で、前年の 42% であった。採捕尾数と有漁隻数から求めた CPUE は 6.7 尾/隻で、前年（7.5 尾/隻）、前々年（8.6 尾/隻）を下回ったが、極めて低調であった 2012~2015 年と比較すると高い水準であった（図 7）。

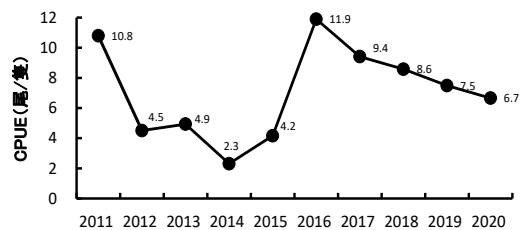


図7. 標本漁協所属船によるクロマグロ養殖用種苗
(ヨコワ) CPUEの経年変化

関連報文

令和2年度国際漁業資源調査・情報提供委託事業報告書，国立研究開発法人水産研究・教育機構。

令和2年における三重県中型・大型竿釣り船のカツオ・ビンナガ漁況総括，三重県水産研究所。